

映画と小説について

論じるためのノート

渡邊 拓

かつて蓮実重彦氏は「映画と文学」といった問題を論ずることほど退屈な試みもまたとあるまい」（『映画 誘惑のエクリチュール』一九八三年）と言った。

私はその「退屈な」ことを取えてやろうとしていることになる。

確かに蓮実氏の言うように「映画と文学とをめぐって、その類似点と相違点とを明らかにしようとする思考の運動は、それがいかに生真面目で律儀なものと映ろうと、映画と文学に対する正しい姿勢とはいえない」のかも知れない。

たとえばそうした「思考の運動」のもっとも「生真面目で律儀な」例として、われわれはシーモア・チャトマンの『小説と映画の修辭学』（田中秀人訳一九九八年 原著一九九〇年）を思い浮かべることができる。チャトマンは映画と小説の表現構造を共通の分析概念——「内包された作者」「語り手」といった従来小説の表現構造を分析するためにつくられた概念——を用いて説明しようとした。しかもそれは相当に成功し、またチャトマンの考察は小説の分析概念をより明確にすることにも貢献しているようである。

しかし、「作品とは」「絶対的な差異が跳梁する場にほかならず、映画

と文学もまた、そうした戯れを介してのみ結ばれあっている」と考える蓮実氏によれば、映画と文学の比較が依拠しているのは「作品を特定の水準のもとでのみ眺めるといふ抽象性」であり、したがって比較は「ある部分を選別し残りを排除するという手続きによって可能となる」。そして「この種の抽象性に安住することは、映画は感性的な体験であり文学は知性的な体験であるといったたぐいの言説に満足する精神と、ほとんど同じ頹廢だというほかはない」ことになる。

正確を期すために付言すると、蓮実氏がここで攻撃しているのは、実はチャトマンのような表現構造論ではない。映画と文学について、その物語内容を説話論的な水準に抽象化して比較するといった論——たとえば、映画の小説化、小説の映画化などについてその物語内容を比較するような論——である。片方が映像と音声を媒体とし、片方が文字を媒体としている以上、比較するとなると、たいていの場合そうした抽象化の手続きを経ることになるのだが、確かにこうした論の場合、映画と小説という表現媒体の差異があまりに安易に無視されてしまう傾向があるようである。

事情はチャトマンのように表現構造を論じた場合でも同じである。小説と映画を同じ分析概念で論じようとするれば、当然抽象化の過程を経ることになる。

蓮実氏が重視するのは「絶対的な差異」であり、個々の作品の具体的な細部なのだが、しかしそこに徹底してこだわると、映画は観るしかない、小説は読むしかないことになってしまふ。

なおかつ日本の近代文学史を眺めてみると、どうやら大正期の小説が

映画とながしかの関係を持ったことは紛れもない事実であり、蓮実氏の言に従ってばかりいると、この関係を分析することはできないことになる。

そこで、蓮実氏の批判を考慮しつつも、とりあえずは何とか「頹廢」にまでは至らないような方法を探さなくてはならないわけである。

映画と小説の物語内容を説話論的水準で比較するにしても、表現構造を同じ分析概念で論じるにしても、そこでは、具体的な表現媒体がないがしろにされている感がある。どのような表現であれ、そこには物質的技術的条件が関わっている。映画と小説を考える時にこの条件を一つ加えることで、単純に作品同士並べて比較・分析した場合とは異なる様相が観察されるのではないだろうか。

もちろん、その場合も何らかの抽象化は必要であるし、完全に「頹廢」を避けることにはならないのだが、映画と文学のある種の接点を観察するための視界をわずかにでも開くことができるのではないかと思うのである。

物質的技術的条件というのは、つまりメディア論が扱ってきた問題である。

マクルーハンは『メディア論』（栗本裕・河本仲聖訳一九八七年 原著一九六四年）の中で次のように言う。「いかなる発明あるいは技術も、われわれの身体を拡張ないし自己切断したものである。だから、このような拡張もまた、身体の他の諸器官および拡張間に、新しい比率ないし新しい均衡を要求する」。そして、この「拡張」が起こった部分を「直接に検証し認識しようとするかぎり、中枢神経組織に自己防衛的な動

きが生じて、その拡充された領域を麻痺させてしまう」。つまり、新しい技術（メディア）は人間の感覚を改変し、人間はその技術によって起こった変化を意識化することができない、ということであろう。

また彼が、新しいメディアは「われわれの感覚のあいだだけでなく、メディア同士のあいだにも、新しい比率を打ち立てる」というとき、それは、新しいメディアの登場で従来からあるメディア間の関係——恐らく文化記号論的な関係の布置——が変化するということを意味しているであろう。

これらの提言に従うならば、日本に映画が登場したとき、それまで存在していた活字メディアも何らかの改変を被ったということになる。のみならず、その新技術（映画）の登場によって生じた人間の感覚の変化、各メディア間の布置の変化はそれを同時代において経験していた人々には明確に意識されていなかったわけである。その様態を記述することは意味のあることかと思われる。

もっとも、今となってはマクルーハンでは少々古過ぎるのかも知れない。

彼は基本的に物質的技術的条件が人間の感覚、対象の認識方法などのあり方を決定してしまうという、いわば物質決定論と言っている。こうして考えている。マルクス主義的な唯物史観と縁がありそうである。こうした考え方はすでに相当批判されている。

たとえば、マクルーハンの言う「地球村」などはほとんどもう誰も信じることはできない。

彼は、活字メディアは細分化・専門化するメディアであり、個人主義や近代国家を生じるが、テレビやラジオなどの電気メディアは瞬時にし

ですべてを相互作用の場に置く統合的包括的なメディアであり、これによって世界は一つの有機体のごとき「地球村」となる、と言った。『メディア論』で彼が最も力説したのはこの活字メディアと電気メディアの対立である。

彼は活字メディアを冷たいメディア、電気メディアを熱いメディアと言ったが、その区分けで行くと、インターネットは、速度、相互作用の度合いから見ても、恐らくテレビよりもはるかに熱いメディアであるはずである。しかし、一向に世界は「地球村」になりそうにない。それどころか、インターネットはむしろナショナリズム、民族主義の温床となっている感がある。

ベネディクト・アンダーソンはかつて『想像の共同体』（白石隆・白石さや訳一九八七年 原著一九八三年）で国民国家を形成する要因として出版用語を挙げた。この場合、活字印刷という物質的技術的要因も重要であったろうが、何よりも、同じ用語を使うという感情的紐帯に重きが置かれていたようである。実はインターネットでも事情は同じなのかも知れない。

一般の人間は大抵何カ国語も操るような生活はしていない。近隣諸国全ての言語を理解する人などはそういないわけで、したがって、大抵の人間はあまり外国語のサイトに入り込んだりはしない。そうした人々の感情が速度をとまって相互作用した場合、あるいは活字メディアよりはるかに感情的共同体感覚は過熱するのではなからうか。新しいメディアは人々のあいだの敷居を高くし続けてきたかにも見える。

マクルーハンの物質決定論に関しては、その後のメディア論はそれを

否定してきたようである。たとえばフリードリヒ・キットラーは、著音機や電話という技術メディアは中枢神経システムを個別に実現したものであり、その発明のためにはそれ以前に「自然科学において魂というのが消え去ってしまった必要がある」（『グラモフォン・フィルム・タイプライター』石光泰夫・石光輝子訳一九九九年 原著一九八七年）という。技術メディアの登場以前に学問的な観念のほうに変化していなくてはならなかったというのである。また、ジョナサン・クレリーは、さまざまな視覚に関する器具の登場と同時代の神経生理学的な視覚への関心とを因果関係としてではなく、共に視覚（あるいはその主体である「観察者」）を決定していく要因として論じている（『観察者の系譜』遠藤知巳訳二〇〇五年 原著一九九〇年）。

いくつ並べても似たようなもののだが、もう一つレジス・ドブレ（『メディアオロジー入門』西垣通監修・嶋崎正樹訳二〇〇〇年 原著一九九七年）の端的な言葉を挙げておこう。ドブレは、ルターやカルビンの登場以前に聖書の私的読書の例があったことなどに言及しつつ、次のように言う。「技術至上主義と文化至上主義は、本当にどちらか一つを選ばなければならないものなのだろうか。印刷物などの革命（中略…引用者）は、新たに出現した性向（読書、執筆、分類の仕方）と、印刷する装置の出会いによってもたらされたのだと思われる。」

技術的物質的要因と感覚や観念との関係について、明確に定式化するなどはあまりに困難な仕事であり、むしろ可能であるかどうかのほうに疑わしい。ただ、メディアに関して考えていく場合には、物質的な条件と文化的あるいは観念的な領域との双方を視野に置きその交点がどこに

あるかを探りつつ考えていく必要があるようである。つまり、映画の登場に関しては、映画にまつわる言説、映画という技術的物質的な状態の画面からの考察が必要になると思われる。

たとえば、キットラーはさまざまな技術メディアの登場に際しての文学者側の戦きをもとにして蓄音機、映画、タイプライターといったメディアについて書いている。もちろんキットラーの真似などできるものではないのだが、まずは、映画が登場して以来の小説家たちの映画に関する言説を拾い集めてみるというような作業から始めるのが一つの方法のようである。何が起こったのか、もしかすると分かるかも知れない。

(わたなべ たく・本学語学教育センター講師)